非暴力平和隊・日本(NPJ) ニューズレター

Nonviolent Peaceforce Japan Newsletter

第１９号

〒113-0001 東京都文京区白山１－31－９ 小林ビル３階

Tel:080-5520-3077 E-mail:npj@peace.biglobe.ne.jp

Fax:03-5684-5870 Website:http://www5f.biglobe.ne.jp/~npj/

2007年9月13日発行

巻頭言

ＮＰＪ“士族の”商法

安藤 博

非暴力平和隊・日本 事務局長

武力によらずに平和を求めようとするわたしたちにとって、これまで以上に強い逆風が吹いている。昨年の北朝鮮による核実験以来の、一言に言えば、「核保有の冒険が、十分割に合う」とされかねない状況である。米国が、核に敬意を表するかのように、従来はねつけていた「北」との直接対話を進め、「早ければ2007年秋にも、米朝国交正常化」の憶測さえ生んでいる。その米朝間の喋々喃々が、わたしたちに身近な市民の間にも、核を含めた武力に依存しようとする風潮を募らせている。拉致問題も重なって、「やっぱり平和憲法ではなめられるんだ」と。

「非暴力平和」は、護憲にたてこもり、仲間内の親睦を深めるだけでは成り立たない。

巻頭言 ＮＰＪ“士族の”商法 事務局長 安藤博・・・・・・・・・１

日韓東アジア交流会議 スピーカーの略歴 ・・・・・・・・４

日韓東アジア交流会議 プログラム ・・・・・・・・５

日韓東アジア交流会議 会議の概要と特記事項 理事：小林 善樹 ・・・・・・・・６

一層の平和的な社会構築に向けて 会員 前田恵子 ・・・・・・８

スリランカの紛争激化の中の非暴力平和隊 NPSL リタ・ウエブ ・・・・９

リタとマーテイ夫妻について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１

非暴力平和隊の組織、運営体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３

スリランカ地図と NPSL 拠点図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７

「東部の母親たち」 スリランカ４８人の母親たちの詩・・・・・・・・・・１８

ナイロビ総会（９月２６-３０日）について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・２０

NP 戦略５カ年計画の概要（２００８-２０１２年)・・・・・・ ・・・・・・・・２１

２００７年９月理事会議事録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２５

ミンダナオより帰国報告 会員 徳留 由美・・・・・・２７

非暴力平和隊（NP）が行った国際交流の三日間、会場にいて討議にも加わっていながら、本当のところは参加していなかったという思いが強い。開催準備の雑務に追われてきた行きがかりで、会議そのものより、会議が予定通り進行するかどうかが気がかりだったのが、その理由のひとつである。しかし一番の理由は、韓国の仲間（NPC）やスリランカの現場活動家など、海外からの９人も交えた貴重な交流を、「内輪」の集会に止めることのないようにと、思いはいつも会場外に向いていたことである。

わたしたちNPの活動の実際とその意義を広く伝えるという、「外」に向けての発信は、大阪でのシンポジウムを含め、残念ながらいかにも不十分なものだった。しかし、「外」に向けてしなければならない大事なことが、この先にもある。その意味で、自分にとって交流会議はまだ終わっていない。というより、このニュースレターが皆様のところに届く９月の中旬からが本番である。

今回の交流参加者は、NP日本(NPJ)関係の20人(うち学生６人)、NPC関係７人（同４人）、スリランカ現地の活動者など外国人ゲスト４人、通訳２人の、延べ３３人である。三日間の会議合計約10時間。それに、会議終了後の食事中も、その後も、語り合いは尽きなかった。電子メールやFAXの交信では得られない血の通った交流が出来た事、それ自体高く評価できよう。

その反面で、当初の目的に照らして重要な点で至らないところがあったことも否めない。その最たるものは、交流二日目夜、＜大阪クリスチャン・センター＞で開催したシンポジウムの参加者が、わたしたちNPメンバーを下回るほどに少なかったことである。デービッド・グラントNP戦略計画ディレクターは、ワシントンへの帰途、機内で書いた会議出席報告のなかで、「一般市民に参加を求めた公開の討論会だったが、外部からの参加者は少なかった」と率直に書いている。マスコミなどを通じた広報が不十分だったと、反省しなければならない。

その、少ないが故に特に大切にしなければならない23人の氏名を記した参加者リストが、一時的とはいえ“行方不明”になった。外部からの参加者に、「資料代」500円の支払いを求めるとともに会場入り口で書いていただいた、今回の交流のかけがえのない成果物である。このリスト“捜索”のメールが流されているのを見て、愕然とした。「外」との交流の成果を、いかにも粗末に扱っていたことがあからさまになったからである。本来なら、事務局長である筆者が、その名簿をしっかりかかえてシンポジウム会場を出るべきだった。それを忘れて、次に予定されていた懇親会へと走ってしまったのは、なんともあさましいことである。

書いていただいたお名前のなかには、あまりの“達筆”でいまだに氏名が判然としないものもある。これまた、「外」との接点に対するこころ配りのなさ故である。

このシンポジウムに関連してはまた、NPJへの入会を求めるための“必需品”、会費振込み用紙を持参していなかったことも悔やまれる。「わたしたち、がんばってますよ」と

アピールするまでで、「だからメンバーになり、お金を払らって下さい」と踏み込むことが身についていないのだ。瑣末なこととはいえ、「非暴力平和」をより多くのひとに広げていこうとする根性の据わっていないことが、はしなくも現れたというべきだろう。「外」、「外」というわりには、「外」とのつながりを本気で考えていないと言われても仕方あるまい。

「理事会メンバーたるもの、家を出るときは必ず NPJ リーフレットをカバンに入れていけ」と号令する共同代表の君島さんや、缶バッチ販売から「NPJ メンバー不在県をゼロにする」キャンペーンに至るまで、連日のように会員拡充策を提案される監事の鞍田さんのような方が、NPJ にもおられないわけではない。しかし、他の市民活動グループの集まりなどと比べて思い当たるのだが、概して NPJ の仲間たちは、会員の確保・拡充に、泥臭く取り組む“商人道”に欠けているようだ。言って見れば“士族の商法”である。それは、筆者が関わる他の市民活動にも見られる傾向である。とすれば、NPJ“士族の商法”の甘さは、事務局長を勤める自分にこそあるというべきなのだろう。

“士族”では、市民活動組織の維持はおぼつかない。国際交流に多くの時間を費やしている間にも、NPJ の会費収入のジリ貧が進んでいる。「外」どころではない、“お家”の一大事である。

＜高野山＞を機に『非暴力で創る平和』と題する本を出そうという企画は、この交流を「外」につなげるための決定版である。２００７年２月、京都で開いた＜日韓交流実行委員会＞で小笠原理事が提案し、君島・代表が「＜高野山＞を最初で最後の編集会議として、一気呵成に原稿の集約にかかろう」と宣言して始まった企画である。海外からのゲスト３人の原稿は、既に日本語に訳されている。大島みどりさんなど少なくとも５人から、原稿が提出されている。ミンダナオの NP 現地活動から帰任した徳留由美さんは、全面的に手直しした第二稿を送ってこられた。交流会議の膨大な討議記録も活字になっていて、それをこの本の一部とするための作業が進んでいる。

なんとか２００７年のうちに、「非暴力平和隊」の本を、全国の書店に並べるようにしたい。＜交流会議＞の真摯な話し合いを、NP 活動に無縁のひとたちに、活字と写真を通して知ってもらいたい。値段はあまり高くならないように、だから新書版程度の手軽なものにする。それでも２０００円近くにはなるだろう。お代をいただくにふさわしい、質と読みやすさを備えたものにしなければならない。この６月、小笠原理事のご紹介で出版企画を協議した東京・千代田区外神田の明石書店の編集者は、発刊部数を「１０００部」としたこちらの提案を「ずいぶん控えめな」とわらい、「少なくとも２０００部」と逆に肩をたたいてくれた。

原稿取りまとめの雑務を引き受けた関係で、自分では執筆メンバーに加わることができないだけに、この出版の晴れがましさと使命の大きさに胸躍る思いがする。前垂れをかけて会員を募り会費を集めるというのは不得意な、言ってみれば“士族の

商法”の NPJ メンバーが、活字を通して一発クリーン・ヒット的に広く強いインパクトを持った会員獲得のキャンペーンを行うチャンスである。「非暴力」を正面から謳い、「平和」を高く掲げた本が多くのひとびとに読まれるようになる日を思って、いまからわくわくしている。
皆さん、この本を知り合いなどに配るときは、「振込用紙」をしっかりはさむことにしましょう！

会議参加者

スピーカーの略歴

・君島東彦
ＮＰ日本共同代表
立命館大学国際関係学部教授。専門は憲法学、平和学。早稲田大学法学部卒業、シカゴ大学ロースクール修了。

・パーク・スギョン(Park Sung Yong)

ＮＰ韓国共同代表（写真）
メソジスト教会神学大学大学院卒業。米国テンプル大学で宗教学部博士課程卒業。キリスト教関係諸団体、諸活動の代表、理事等に携わると共に、市民社会における生命･平和関連連帯活動、平和教育･訓練にも携わる。

・デーヴィッド・グラント

ＮＰ戦略計画ディレクター（写真）
美術及び創造的著述の修士。
オランダを拠点として国際友和会（IFOR）のアフリカ、アジア、中東担当。中東（イスラエル･パレスチナ）のオランダ監視団のためのトレーナーも兼ねた。「文化芸術による非暴力的奮闘」に特に関心を持つ。

・リタ・ウェブ（Rita Webb ）

ＮＰスリランカ活動メンバー　　－リタと大島みどりみどり－
スリランカ FTM 第 1 次メンバーとして 2003 年 9 月から赴任。(在ヴァルチェナイ)
教育学修士。ウイスコンシン大学で成人教育に関わる。地元の平和と人権運動について積極的なコミュニテイ･ボランテアとして活動。サルヴォダヤ USA 理事。

・ジャルガルサイハン・エンフサイハン（Enkhskhan　Jargalsaikhan）
モンゴル元国連大使（1996－2003 年）
国際法博士（モスクワ国際関係研究所）。
ウランバートル戦略研究所、ブルー･バナー所長、モンゴル戦略研究所主任研究員。

＜非暴力平和隊日韓・東アジア交流会議＞

2007/8/9－8/11

日・韓非暴力平和隊共催

＜8 月 9 日（木曜日）＞　15:00 － 18:00.　第１セッション

高野山大学会議室

日韓ＮＰ代表者などのスピーチと討論

・君島東彦ＮＰ日本共同代表

「非暴力平和隊と日本国憲法－暴力の現在、非暴力の未来－」

・パーク・スギョン(Park Sung Yong)ＮＰ韓国共同代表

「韓国民主化運動 20 年の評価と新たな挑戦」

・デーヴィッド・グラントＮＰ戦略計画ディレクター

「非暴力平和隊の挑戦と好機　5 年を経て、学んだことは何か?」

・リタ・ウェブＮＰスリランカ活動メンバー

「スリランカの紛争激化の中の非暴力平和隊　停戦協定が崩れた中で」

・エンヘサイハン元国連大使

「北東アジアにおける、非核兵器地帯構築の展望」

＜8 月 10 日（金曜日）＞　8:00 － 11:00.　第２セッション

高野山大学会議室

討議：ＮＰ活動の実績評価と今後の方針

18:30 -21:00　国際シンポジウム：

大阪クリスチャンセンター

＜日本国憲法９条を実践する国際 NGO　非暴力平和隊の挑戦＞

パネリスト：

・パク・スンヨン(Park Sung Yong)ＮＰ韓国共同代表

・　リタ・ウェブＮＰスリランカ活動メンバー

・デーヴィッド・グラントＮＰ戦略計画ディレクター

司会：君島東彦ＮＰ日本共同代表

＜8 月 11 日(土曜日)＞　10:30 － 12:00　立命館大学世界平和館見学

13:00 － 14:00　立命館大学　会議室

ＮＰ世界総会 (2007/9 月、ナイロビ) に向けて、交流会議の総括・締めくくり。

日韓・東アジア非暴力平和隊交流会議　会議の概要と特記事項

理事　小林 善樹

別項の会議スケジュールのように開催されたが、今回の交流会は、昨年の第1回日韓交流会よりも一段と内容のある交流会になったように思う。しかし、日本からの参加者が、通訳二人、学生ボランティア三人の他、16人に留まったことは残念だった。

君島共同代表のスピーチの中で、日本国憲法前文後段に謳われている決意こそ、非暴力平和隊の理念につながるものであり、日本国憲法と非暴力平和隊は、互いに補いあうもの、両々相まって世界の平和を構築できるのだ、という趣旨は聴衆の共感を呼んでいたようだ。憲法前文の精神と9条に基づいた「する平和主義」をもっと唱道して行くようにしたいものだ。望むべくは、全国で6千にも達したという「9条の会」の人たちが皆 NPJ の会員になってくれることだ、というアピールに少しでも応えたいものだ。

韓国のパーク氏のスピーチの韓国民主化運動の経緯で、韓国の民主主義が日本よりも格段と進んでいることを知らされた。

歴史にイフはないというが、もし 1945年8月8日のソ連参戦以前(たとえば2月の近衛上奏時点や 6 月の終戦工作時点)に敗戦を受け入れていたならば、韓半島分断、南北の対立、さらには朝鮮戦争は発生しな

かったのではなかろうか、という意味において日本に重大な責任がある、と考えている私にとって、なんとも申し訳ない心痛む思いで聞かざるを得ないものだった。

パーク氏の 10 日のシンポジウムでのプレゼンテーションは出色の内容だった。市民団体が寄り集まって、政府側が作成する「国防白書」に対抗する「平和白書」を作成するとか、韓国内平和活動家たちの2泊3日のワークショップ開催など、目を見張るような活動が NPC も参画してすすめられているのだそうだ。NPJ も大いに学ばなければならないのではなかろうか。また、その中で触れられていた「ハンガン(漢江)河口を平和の海に」のイベントには、奥本理事とともに私も参加して来たのだが、54年前の朝鮮戦争の休戦協定締結日にあたる 7月27日に、五つの市の協賛、70もの市民団体の共催で1,000人もの人が集まってのフェスティバル、2 隻のフェリーボートをチャーターして750人の人が民間人立ち入り禁止になっているハンガン河口の中間点まで航海し、「笹舟」を載せた筏を浮かべ、南北統一を祈念してこの河口を平和の水域に変えようとの思いを表していたの

だが、これだけの人を引きつける運動を展開している韓国の運動の実力に敬服した。

公式スケジュール以外にも、夜遅くまで、南北統一に対する考え方、その難しさなど、論議を深めたことも大いに意義深いことだった。年末におこなわれる大統領選挙で、たとえ政権が変わっても、多少の変化はあるだろうが、南北統一への方向に変わりははないだろう、との見通しを聞いて、心強く思ったことだった。

リタ・ウェブは、夫君も巻き込んでスリランカに移住し、4 年間も続けているスリランカでの活動を報告してくれたが、現状をよく知ることができた。詳細は別項に譲る。

NP の原則である Nonpartisanship(政治的に立場をとらない)についての論議の中で、ディヴィッド・グラントは、活動の原点は「世界人権宣言」にあって、この宣言は人民の立場に立つことであり partisan な立場だ、と明言していたが、NP の Nonpartisanship との関連がよく理解できなかった。この問題はなかなか微妙な難しい問題であることを感じた。その「世界人権宣言」は 1948 年に国連で採択されているが、30 条にわたる内容は、1946 年に公布された日本国憲法の 10～40 条までにほぼ網羅されており、日本の憲法の先進性を示していて、その草案を作った憲法研究会と鈴木安蔵のすばらしさを改めて痛感させる。

モンゴルのエンフサイハン氏のスピーチで、非核兵器地帯を一国で進めて来ており、さらに北東アジア非核兵器地帯を目指そうとの意気込みに感銘を覚えたし、韓国、北朝鮮と等距離外交を実行し、市民による 6 カ国協議によって、北東アジアの平和を押し進めよう、とのアピールには大いに共鳴した。モンゴルでは政府に対する NGO の影響力が大きいようだ。同氏は、5 月にモンゴルで開催された GPPAC(武力紛争予防のためのグローバル・パートナーシップ)に参加した安藤 NPJ 事務局長の招聘により、広島への来日日程を伸ばして 1 日だけ参加していただいたものだったが、モンゴルは 6 月には「核戦争防止国際医師会議(IPPNW)北アジア会議」も開催するなど、活発な国際的関与をおこなっており、今回、日朝国交正常化作業部会のホスト国を務めているのもその一環だろう。

今後の活動として、日韓合同の非暴力トレーニングなどが提案されており、いろいろな面での協働が進むことが期待されるのは、この交流会の成果だろう。

高野山には今回始めて訪れた。千年の歴史を感じさせる寺院の数々、そして宿坊、さすがは世界遺産である聖地と感銘を受けた。また、寺院建築の柱や梁の壮大さ、建築技術の精緻さには驚かされた。

後日談になるが、8月12日にリタ夫妻を広島までご案内し、広島平和記念館などを見学して来たのだが、その夜は岡本三夫理事ご夫妻から「広島風お好み焼き」をご馳走になった。その席での岡本珠代さんとリタとの対話の中で、交流会におけるリタの発言が分かりやすい英語だった、という話になり、スリランカで4年間みんなから「もっとゆっくり、もっとゆっくり」と言われ続けたので、ゆっくり話すようになった、とのこと。かねがねネィティヴ・スピーカーたちのペラペラ英語に、不満を持って来た者として、「もっとゆっくり」を連発して行けば、彼らもわかってくれるようになるんだ、ということを実感した。

一層の平和的な社会構築に向けて

会員　前田　惠子

ＮＰＪメーリング・リストに東アジア交流会議ご案内のメールが流れた時に、胸が高鳴りました。これに参加すれば、魅力にあふれたＮＰＪの仲間たちと再会ができる！韓国など海外のゲストの方たちと交流ができる！世界遺産の高野山へ行ける！などという理由からでした。我ながらミーハーですね。自分の知識のなさや不勉強などの理由から不安な思いもおおいにありながらですが、８月は個人的にいろいろな体験をしようと決めていたこともあって、「参加します！」と手を挙げたのでした。

８月７日に広島湾ピーススタディ・クルージングに参加した際に、岡本理事ご夫妻とゲストのグラント氏、エンヘサイハン氏にお会いしていたことにも、運命？のようなものを感じました。私のような平凡な人間にとっては、この数日の間に受けた感銘は生涯忘れられないものになることと思います。出会いというものは大切だと、振り返って改めて思います。

さて印象深かったことは数々ありますが、３点だけを記したいと思います。

先ず、韓国の朴成龍氏のお話です。自国の民主化運動の体験を踏まえながら、今後の課題、非暴力による市民運動の意義と展望が語られたことには、今更ながら感銘を受けました。

独裁軍事政権から民主主義を勝ち取るための過酷な経験も持たれている朴氏はまた、「個人と地球的市民性」に言及。平たく言うと「暴力に依らない、人間的なつ

ながり」の必要性を述べられ、ご自身のパートナーとの関係にも触れられて「非暴力的な生き方の可能性」を示唆されたことは、隣人の貴重な言葉として受け止めたいと思いました。

二つ目に、君島代表の言われる「脱安全保障化」や「ミリタリーをシビルに置き換えようとする世界の努力・潮流」について、一般的にわかってもらうための努力がもっと自分にも必要、ということです。軍備に頼る社会の経済的側面、つまり企業も個人も戦争で儲けようとすることなどが説明できると説得力が出るかもしれません。

もう一つ、三つ目に、ＮＰへの理解・支援を得るためには、どのようなプロセスを経てＮＰ活動が行われているのか？が、もっと視覚的にわかるといいのではと思いました。具体的・視覚的ツールというものに慣れている現代人には特に。大阪クリスチャンセンターでの一般参加者のいるシンポジウムでの感想です。

「非暴力平和」は、高く遠い理想ですが、私たちの身近なところにも、この理想が生きてきていることを感じることがあります。たとえば、私たちの関わるピースアクションの、先日の集まりで、印象に残ることがありました。ピースボートによる「出前地雷教室」があったのですが、ワークショップの中で参加の子どもたちは「戦争ごっこ」ができないでいたのです。講師の「殺しに来て」という言葉に、シュミレーションであったとしてもショックを受けたようでした。暴力を否定する社会環境をつくってきたことの、一つの成果でもあると感じました。ただ私たちの暮らす社会は「積極的な非暴力行動」に理解を示す土壌がまだまだ不十分であることを感じることもしばしばです。一層の平和的な共生・公正な社会構築に向けて、できることを足元から模索していきたいと言うのが正直なところです。

ともあれ今回の会議への参加は、私にとって意義深い経験でした。多くのすばらしい方たちとも知り合うことができ、共に時間を過ごせたことも大変貴重なことでした。末筆ながら運営して下さった全ての方がたに、深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

スリランカの紛争激化の中の非暴力平和隊

停戦協定が崩れた中で

－NP スリランカ活動メンバー
リタ・ウエブの発言要旨－

リタのスピーチの全体の要約と言うよりも、印象に残った点を下記に記したい。

スリランカの毎月の月報、別記の詩「東部

の母たち」、リタのインタビュー記事などもあわせて読んでいただきたい。（大橋　記）

♦ スリランカ･プロジェクトは、如何にして世界中の民間人が紛争地域の市民社会を支持することができるかの方法を徹底的に追求しようとする NP の理念の「実験室」ーパイロット･プロジェクトーであります。争いに引き裂かれた地域の中で、地元の平和活動家と一般市民が、公正な恒久平和に寄与することのできるように暴力を減らし、防止するのを助ける、という私たちの目標は変わっていません。私たちは毎日、世界中からの善意の人々が、『戦争に対して“ノー“と言ったあとで、”イェース“と言うことのできる何か』を求め、学んでいます。

・　スリランカの NP のすべてのフィールド･サイトで、地元の平和活動家が、紛争に駆り立てた暴力や、時には親族の殺害や行方不明によって、或いはおそらくは武装グループによる強制的な徴兵によって、直接影響を受けている家族を訪問するために私たちに同行を求めたときには、私たちは”イェース“と言います。

・　暴力の可能性を減少させ、暴力が発生した時に対応するためのコミュニテイ･ネットワークを強化したいという、コミュニテイに根ざした団体や地元のコミュニテイのリーダーたちの要請に対して、私たちは“イェース“と言っています。

・　民主的なプロセスと説明責任を強化し、或いは非暴力的なやり方で紛争に対処し、スリランカ人の安全性と信頼性と能力開発を望んで NP に支援を求めるて来る地元や国内、国際的なパートナーに対して、私たちは“イェース“と言っています。

♦ 最近数ヶ月、政府は軍事的解決に再び焦点を当てようと動き出しており、一方、LTTE は昨年だけでこの島に 60 人以上の自爆犯を配置しました。治安情勢は悪化していますが、英国、米国、及びオランダのような国際社会は、慄然とさせられる人権状況に鑑み援助の中断を決めました。米国は、カルナグループ（政府支配地域で活動する武装グループ）の解散、武装解除の要請を表明しました。スリランカ最大の援助国である日本の動向が注目されていましたが、最近になって日本の明石代表は人権侵害に対しスリランカ政府に対し重大な関心の表明をしました。

・　基本的人権侵害を報告しようとする家族の恐怖心のレベルは非常に高いのです。要請に基づき、NPSL は治安の責任者である警察と軍に交渉をします。

・　ある事件では、武装グループは、NP ヴァルチェナイ事務所を訪問しようとする母親と子供を妨害しました。NPSL は地元の指揮官に注意を促し、武装グループと会談を持ちました。その結果、脅迫したグループのメンバーは母親に対して謝罪することになりました。

・　昨年中を通して、多くの若者たち、特に強制的に徴兵された若者たちは、配属された戦闘部隊から何とか逃げ出しました。NPSL はこれらの子供たちに安全な場所を探している家族を支援しています。しかし、NPSL の能力の限界のため、全てに対応することはできません。

・　NPSL は数ヶ月前にコロンボに緊急対応チーム（CRT）を編成し、人権の諸問題に関する各フィールド拠点からの要請に応じて、スリランカ中央政府、地方政府との折衝、国内、国際的人権機関との連携をとるなど、地方の活動家たちとの全国レベルの安全ネットワークを構築しています。

・　トリンコマリーでは、NPJ の協力

により庭野平和財団からの助成金を受けて地元の平和委員会への支援を継続することになりました。人権についての草の根的なワークショップを各地で開催しています。

♦ スリランカにおける私たちの活動は遅々としたものです。それは信頼関係に基づくものです。その信頼は、時間をかけた対話の繰り返しを経てゆっくりと得られるものです。私たちは、非武装の民間平和活動家として、（武力による）抑止力によってではなく、全ての利害関係者に対して立証できる「政治的立場をとらない」「第三者」として、そして、私たちが暮らしているコミュニテイの生活の中に、長期間にわたって「ぴったりとはまり込んでいること」を含めて、私たちが全ての民族の、そして、全ての宗教のコミュニテイからの、そして全ての社会階層からの全ての市民のために、公正をともなう恒久的平和の構築を支援するような深い関わりを持つ「インサイダー」でもある、ということを受け入れることから来るものでなければなりません。究極的には、スリランカだけではなく、まだ暴力が跋扈しているあらゆる場所で。

♦ そのような長期間にわたる関係構築の一つの結果の例証として、私たちがこの一年以上一緒に活動してきた母親たち、子供の強制的誘拐に苦しめられた母親たちの、体験と言葉、そして気持ちを捉えるある種の詩を共有したいと思います。どうか、この詩にこめられた母親たちの気持ちを推し量ってください。ご清聴ありがとうございました。

・　　（「東部の母親たち」の詩は別に掲載しています。）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

リタとマーテイ夫妻について

高野山での会議の合間に、リタ、マーテイ夫妻とデビッド・グラントにインタビュー取材した。リタの NPSL への参加の動機や夫マーテイの合流などの経緯は非常に興味深い。

★リタ：アメリカでも様々なボランテア活動をしてきたが、いつかはフルタイムでやりたいと思っていた。

NP 共同代表のドナ･ハワードとは共にウイスコンシン出身で古くからの友人であり、彼女を通してメル･ダンカンを知った。彼らの平和隊（peaceforce）のアイデアは当初から知っており、その進展をフォローしていた。そして、夫のマーテイには、もし NP がスリランカを最初のプロジェクトとして選んだら自分は応募したいとの意思を伝えていた。スリランカは、サルボダヤ（スリランカ最大の現地ＮＧＯ）のボランテア活動で 2 度ほど訪問した経験がある。

★マーテイ：リタは仕事を持っていたが休暇をとることができた。何年も離れていることはできないが、2 年間ということであったので、自分はアメリカで仕事を続け、家を管理して、リタはスリランカで活躍できると賛成した。

自分はスリランカを知らないので、休暇をとって訪問することにした。2004 年１２月２６日出発の切符を予約した。25 日夜、リタから電話がかかってきて、事情は良く分からないが何か重大なことが起こったらしい、航空会社に飛行機が飛んでいるかどうか確認したほうが良いとのことであった。航空会社に電話を入れると、コロンボ行きの飛行機は予定通りでありキャンセルして

も払戻しはできないとのことであったので、リタもコロンボで待っていることでもあり、予定通り出発し 28 日にコロンボに着いた。スリランカは、12 月 25 日のインドネシア沖地震津波の影響でコロンボ等の一部地域をのぞきほとんどの海岸線で大きな津波被害をこうむり国内は大混乱に陥っていたのであった。

リタの最初の任地は、南のマータラ（大島みどりと一緒に活動）であったが、その当時は東海岸のヴァルチェナイが任地であり、3 週間の休暇をマータラの近くのリゾートで過ごすためにマーテイを迎えるためコロンボに来ていた。NP のマータラ事務所も津波被害に合い、フランク・マッケイが負傷した。そこで、リタはマータラの緊急支援任務に廻り、自分は負傷したフランクをコロンボに搬送するなど、いきなり救援活動に駆りだされて休暇どころではなくなった。

しかし、NP の活動に接したおかげで NP の活動がなかなか進展しない状況を知り、同時にリタの滞在を延長して活動を続けたいとの希望を理解できた。

そこで、リタはスリランカにとどまり、自分がスリランカに移って来ることにしたのだ。

★リタ：スリランカに応募したもう一つの理由がある。

“我々が戦争に‘ノー’と言うときに、何に対して‘イェース’といえるのか”を真剣に考えてきた。1991 年の湾岸戦争で、米国人として、ただ傍観者として批判しているだけでなく、平和のために相応の犠牲を覚悟すべきであると思った。私たちが平和にコミットするにはどうしたらよいのか、その答えがスリランカ・プロジェクトへの参加であった。

★マーテイ：お祖父さんにはふさわしい仕事だ（笑い）。（ご夫妻には 4 人のお孫さんがいる）NP スリランカは様々なバックグランド（国籍、経験など）を持ったボランテア集団で、若い人たちが多い。しかもリスクもある。このような集団をまとめるには年寄りも必要である（笑い）。

★リタ：コロンボのスタッフは優秀であるが、何分、人数不足である。コロンボから遠く離れたフィールドのサポートはなかなか難しい。また、FTM も勤務中は 24 時間、週 7 日体制で精神的、肉体的に厳しい。交代での休暇、病気、外部会議出席などで、拠点で常時活動できるのは 2,3 名の時が多い。就業許可、VISA 取得等の制約などやむをえない事情もあるが、もっと資金を増やして FTM の増強ができればと期待している。

★マーテイ： NPSL の活動内容を考えると、スタッフの拡充と固有なマネッジメントの訓練が必要であろう。資金提供者はサポートやマネッジメントに関心が薄いが,P.R.を工夫して資金提供者の理解を求め解決していく必要がある。

★リタはウイスコンシンの大学でキャリアー・コンサルタントの成人教育に関わった経験があり、マーテイはウイスコンシン大学で応用倫理学の教鞭をとっていた。二人の存在はヴァルチェナイという東海岸の離れた場所にあっても、NPＳＬの中で求心力として働くのではなかろうか。

非暴力平和隊 意思決定の全体組織

2007年8月現在

運営委員会
エリック・バックマン
スタッフ メル・ダンカン事務局長
経理、資金調達、職員、内部通信、新規事務所に関する提案の研究および作成。

管理部門、資金調達チーム、コミュニケーション部門

プログラム委員会
ドナ・ハワード
スタッフ クリスティン・シュバイツァー
新規の配備、配備の終結に関する提案の研究および作成。
進行中の配備の監視

プログラム部門、戦略関係部門

戦略・計画委員会
ジョン・スチュアート
スタッフ ディヴィッド・グラント
メンバー団体の諸問題、戦略計画、ワーキング・グループおよび連絡グループに関する提案の研究および作成

能力構築部門、戦略関係部門

国際理事会(IGC)

責務 IGCは、メンバー団体が3年次総会において設定する枠組みの範囲内で、非暴力平和隊のあらゆる広範な方針を設定し、監督する。
年次計画および予算の承認。
プロジェクトの開始と終結を決定する。
メンバー団体の承認と排除。
委員会によって提案される方針の設定と監督。
執行部の評価に基づいて、事務局長を雇用し、解雇する。
メンバー団体の3年次総会の準備

メンバー団体（地域）
（国際、アフリカ、ラテン･アメリカ、アジア/太平洋、ヨーロッパ、中東、北米）

共同代表
ドナ・ハワード、オマー・ディオプ
責務 事務局長(ExecutiveDirector) の活動を監視し、評価し、支援するとともに、執行委員会に対して報告する。
必要あれば、スタッフと事務局長との間の論争を解決する。プロジェクトに関する緊急決定をおこなう。執行委員会のアジェンダを準備し、議長役を務める。

事務局長、ディレクター部門

執行委員会
ドナ・ハワード、オマー・ディオプ
スタッフ メル・ダンカン
責務 全体の活動の進行状況についての月報を受理。
IGCによって設定された政策に基づくIGC会合の間に必要な政策決定。
他の委員会からの提案の受理ならびに組織のレベルに関連する意志決定に口を出す。
月々の資金申告のレビュー、IGC会合のアジェンダの準備。委員会およびワーキング・グループの活動の監視

能力構築委員会
ヒントロ・ポカワ
スタッフ フィル・エスモンデ
地域トレーニング、即応能力、リザーブ・プール、ユース・イニシャチブに関する提案の研究および作成

能力構築部門

非暴力平和隊の全体組織
国際理事会、執行部、委員会　　メンバー

2007年８月

国際理事会(IGC)　　（定員１７名、現在１５名）

アフリカ　（２名）　　オマー・ディオプ(共同代表)、ジョン・スチュアート
ラテンアメリカ　（２名）　クラウディア・サマヨア、アントニオ・コエルホ
アジア太平洋（３名）　　ヤング・キム、君島東彦、ラム・マニヴァナン
ヨーロッパ（３名）　　ティム・ウォリス、カイ・フリチョフ・ブランド・ヤコブソン、
シモネッタ・コスタンツォ・ピッタルーガ(事務局長)
中東　（１名）　　イスラエル・ナオー
北米　（２名）　　ドナ・ハワード(共同代表)、シェリ・ワンダー
国際団体　　エリック・バックマン(財務担当)
その他の団体　　ヒンドロ・ポカワ

共同代表
ドナ・ハワード、オマー・ディオプ

執行委員会
ラム・マニヴァナン、クラウディア・サマヨア、ドナ・ハワード、オマー・ディオプ、
ジョン・スチュアート、エリック・バックマン、シモネッタ・コスタンツォ・ピッタルーガ

能力構築委員会
ヒントロ・ポカワ、オマー・ディオプ、ヤング・キム、ラム・マニヴァナン、
シモネッタ・コスタンツォ・ピッタルーガ

戦略・計画委員会
ジョン・スチュアート、イスラエル・ナオール、オマー・ディオプ、カイ・フリチョフ・
ブランド・ヤコブソン、シモネッタ・コスタンツォ・ピッタルーガ、マイケル・ポカワ

プログラム委員会
クラウディア・サマヨア、シェリ・ワンダー、エリック・バックマン、ドナ・ハワード

運営委員会
ティム・ウォリス、ジョン・スチュアート、クラウディア・サマヨア、
エリック・バックマン

非暴力平和隊　スタッフ部門構成

2007 年 8 月現在

ディレクター・チーム

- 組織全体あるいは部門間の活動について相談に乗り、調整し、監視する。
- すべての活動上の問題に関する意志決定権限
- この組織の使命と目標とともに、新規の、あるいは継続中のプロジェクト/イニシャチヴそれぞれの有効性ならびに一貫性の継続する展開ならびに分析
- 人員計画、管理、ならびに展開
- 事務局長を支援

メンバー　事務局長、各部門ディレクター、地域コーディネーター代表

事務局長 ： メル・ダンカン

- 役員会およびスタッフとともに、組織の使命と展望を展開し、統合し、伝える。
- この組織とその計画のための、資金を調達し、国際的資金調達活動を指揮する。
- この組織の継続中の支払い能力を確かなものとするために、この組織の活動を管理する。
- 新規計画の実行および評価に対する監督を提供する。
- この組織のさらなる発展を目指して外部との関係を構築し、育成する。
- 国際理事会およびその執行委員会の活動を報告し促進する。

戦略関係部門

- メンバー団体との関係
- 唱道活動(国連、大規模NGO など)
- フィールド・プロジェクトの初期調査

ディレクター：　ディヴィッド・グラント

地域コーディネーター

(アジア) (東アジア太平洋サブ地域) (北アメリカ) (ヨーロッパ) (ラテンアメリカおよびカリブ海) (アフリカ) (地方支部コーディネーター)、

コミュニケーション部門

- 印象付けとメッセージ　・外の世界への現地通信　・内部通信　・ニューズレター、レポート、ウェブサイト　・プレス/メディアとの接触

ディレクター　：(7 月には採用)

能力構築部門

- 新人募集と評価　・即応能力の開発
- 地域クレーニング　・カリキュラム開発

ディレクター　：フィル・エスモンデ

資金調達部門

- 個人的ドナー、基金、国際機関、
- 宗教団体からの資金集め。

ディレクター　：アグニエスカ・コモチ

プログラム部門

- フィールド・プロジェクトすべての管理
- 新規プロジェクトの実施
- 緊急行動ネットワーク

ディレクター：　クリスティーン・シュバイツァー

スリランカ・プロジェクト

プロジェクト・ディレクター　マルセル・スミッツ

ミンダナオ・プロジェクト

プロジェクト・ディレクター　アティフ・ハミード

グァテマラ・プロジェクト

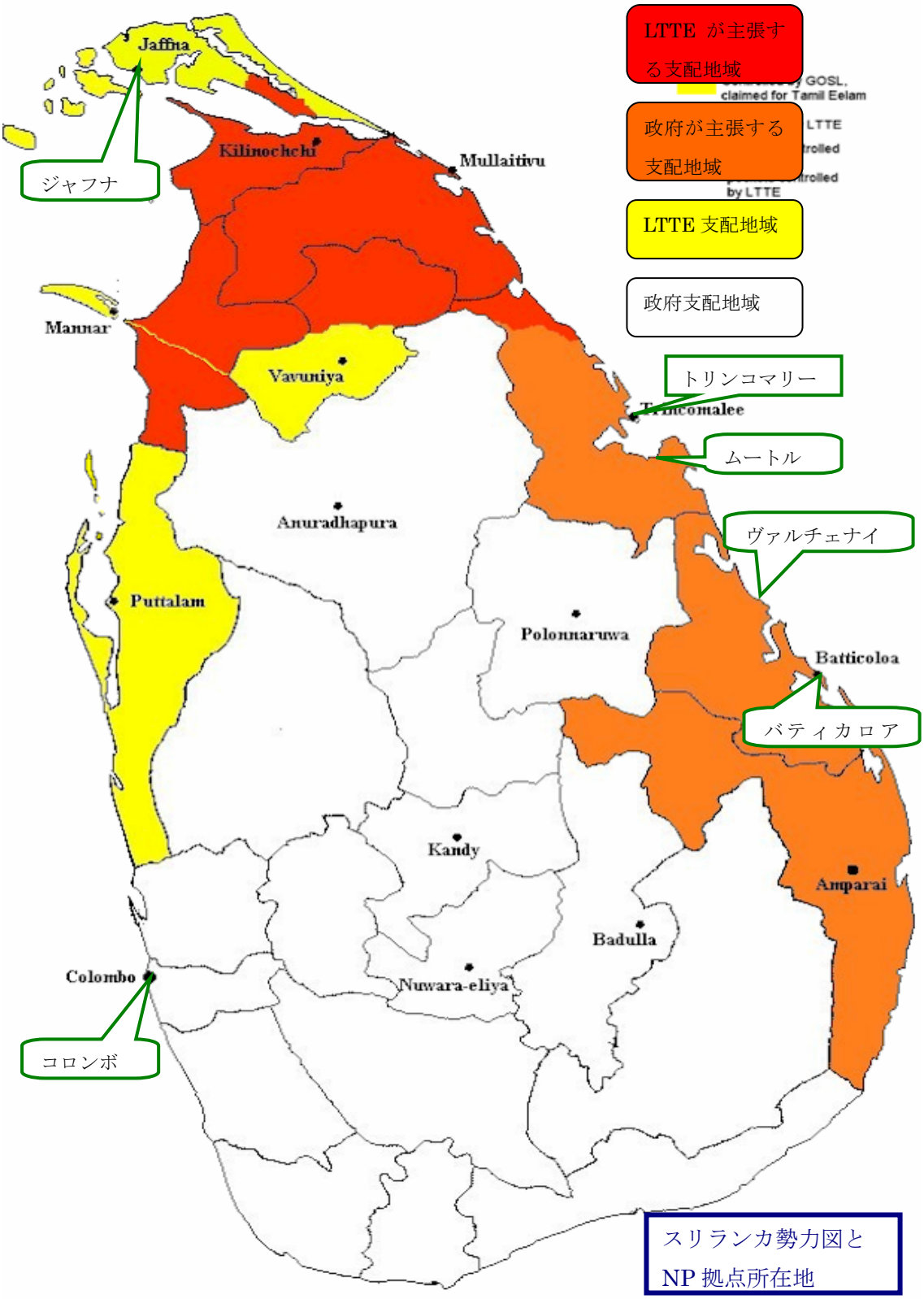
チーム・コーディネーター　ベツィ・クリテス

ウガンダ・プロジェクト

プロジェクト・ディレクター　オルー・オチエノ

コロンビア・プロジェクト

プロジェクト・ディレクター　未採用



スリランカ勢力図と
NP 拠点所在地

「東部の母親たち」

違う村々からやって来た 48 人の母親たち、子どもの強制的誘拐に苦しめられた母親たちが、子どもたちを探し出すための支援を求めて最後に私たちの所にやって来ました。
私たちが、この母親たちと 1 年以上一緒に活動する中で、私たちが母親たちと開いた一連の集会の中で集められた母親たちの体験と言葉、そして気持ちを詩の形でまとめたものです。（リタ･ウエブ）

彼女のふたりの子どもたちが、ひとり、またひとりと武装された男達に連れ去られた。
深い悲しみに包まれて、彼女は世界から隔離された。
待ち続けて。

来る日も来る日も、子どもの叫び声が路地から聞こえる。
「アンマ、アンマ、あいつらに連れてかれちゃう！」子どもは泣き叫ぶ。
彼女はやはり母親。誰の子でもかまわない、子どもを守るために突進する。
子どもたちを収穫しにやってきた男達に立ち向かうために。
失うこと再び。
空っぽの彼女の腕だけが残る。

空を旋回するタカが、雛鳥を見つける。
その鉤爪から逃れる術はない。
残された母鳥が、散らばった雛の羽を集める。

暗闇の中で、子どもたちが母親の腕から奪い取られる。
これから先彼女はどうやって夜の眠りにつくことができるというのか。
誰も知らない見放されたキャンプから、ジャングルを抜け、再び家に帰り着く子どもの夢が、彼女の毎夜の目覚めにつきまとう。
子どもよ（息子よ、娘よ）、今どこにいるの？

『子どもたちは戦士になるんだ、母国を守るためにね』
そんなことばは母親を一向に救わない。
涙で両目は見えずとも、彼女は探し続ける。

『わたしの子どもたちは戦士じゃない。母国に見捨てられた子ども以外の何者でもない』
流れ落ちた涙が水の跡となっても、彼女は探し続ける。

子どもたちが荒野を逃れ、ジャングルを抜けて家に帰ってきたという話が耳に入る。
小さな希望の灯火がともる。いつか、私の子どもも家の戸口に立つ日が来るかもしれない。
失ったものを埋め合わせるかのごとく、わたしたちは小さな希望のかけらにおずおずと手を伸ばす。

家の扉はいつでも開いている。いつか誰か、NGO や国際機関の外国人かもしれない誰かが、戸口に現れて、開口一番こう言う。
『あなたのお嬢さんは無事だ！』

いまはまだ、わたしたちの無念を覆い隠すように、彼らの車の排ガスが家に入ってくるだけだけれど。

息子を探して、母はすべてのキャンプに足を運ぶ。たとえ存在しないと言われた場所へも。
『これが息子の名前です。こんなすてきな美しい名前を持った子は、ここにいませんか。』
人々は微笑む。『そんな名前の子は、ここにはいないよ』。

『いや、待てよ…われわれは、子どもたちに違った名前をつけたんだっけな。』
『なんですって？違う名前？私の息子の名前はこれだけ。
占い師につけてもらった特別な名前なのよ。ほかにどんな名前をつけたというの？』

『ほら、あそこにいた！』
他の子どもたちに混じり、しりごみをするわが子を、母はみつける。
彼のほんとうの名前を呼びながら、彼女は手を差し出して息子に駆け寄る。
返事は…ない。
『それは僕の名前じゃないよ。
彼らはいろんなやり方で、僕を変えてしまったんだ。
僕は僕じゃない。
いまではもう…。』

『そうだ、あなたの息子が正しいのさ。
だいたい名前なんかに何の意味がある？
われわれはすべて母国のために戦う自由の戦士なんだ。』

母は息子の食事をこしらえ、皿に盛る。
けれど、息子はそこにいない。もうずっと長いことといない。
彼女はその手を休める。
そのときふいに声が聴こえる。『アンマ、どこにいるの？僕、おなかがすいたよ！』
彼女は飛び上がってごはんを皿に盛る。いつでも用意はできている、いつだって。
けれどそこには誰もいない。

毎夜彼女は新しい食事を作る。
息子に残り物は食べさせない。
翌朝料理は鶏のえさとなり、彼女はまた息子の食事を作り直す。

きょうも、あしたも、あさっても、母は食事を作り続ける。
希望は煮詰まり、ふきこぼれる。
それでも彼女は作り続ける。
数日が数週間となり、数年になろうと。
息子よ、お前はどこにいるの？

あなたたちは、私たちをミーティングに呼ぶ。
子どもを盗られた親たちのためのミーティング。
時には外国からの“大切な”お客様が来て、わたしたちの悲しいストーリーを聴きたいという。
わたしたちは、じぶんたちの悲しい話に疲れてしまった。
こんなミーティングが何の役に立つのか、

教えてほしい。
誰がわたしたちの質問に答えてくれる？
答えをくれたことなど一度もないじゃない。
なのに、なぜミーティングに来るよう言い続けるの？
いつまで、あと何回、ミーティングをやろうと言うの？
あなたたちは、わたしたちの断末魔の叫びを長引かせ、絶望を深めているだけ。
死を選ぶほうが楽かもしれない。

別の機会に、いずれそんな日が来たら、わたしたちはお会いして、もっとたくさんの大切なことを話せるかもしれない。
子どもたちの教育のこと、健康のこと、食生活のこと、彼らの将来のこと。
それまでは、いまはただ、縞模様だろうが、色つきの制服だろうが、いわゆる“解放者たち”の手から、子どもたちを救い出すためだけに、わたしたちは会い続ける。
彼らは母国のために戦っているのだと言う。
けれど、わたしたちこそが母親。
わたしたちはいったい何のために戦っているんでしょう？

（訳：大島みどり）

（縞模様は LTTE 兵士、色つきの制服は政府系武装グループ）

注記:この詩は、48 名の母親たちのものです。
まだ、母親たちの了承は取り付けていませんのでご留意お願いいたします。

非暴力平和隊

ナイロビ総会（9 月 26 日―30 日）について

2002 年 11 月、インドで行われた設立総会以来、初めての 3 年度総会が 9 月末ナイロビで開催されます。会社にたとえるならば株式総会の相当する重要な出来事ですので、簡単にその概要を説明します。5 カ年間戦略計画の概要は別記の通りです。

1. ナイロビ総会の意義：

設立総会で NP の最初のパイロット･プロジェクトとしてスリランカを決定し、2003 年 9 月より派遣開始し丸 4 年を経過しました。設立総会では理念先行でしたが、4 年間のフィールド派遣の評価とこの間の具体的な様々な議論を整理し,NP の今後の現実的な目標についてのコンセンサスを創る位置付けを持っています。
総会は、当初 3 年毎開催でしたが、今回は 4 年後となりました。

2. 総会での重要審議･決定事項

今回の総会で様々な案件が審議されますが、決議を要する重要案件は次の 3 点です。

① 新国際理事会メンバーの選出：

国際理事会は会社でいえば取締役会に相当するものです。設立総会で、各地域並びに国際枠から 17 名の理事が 3 年間に任期で選出されました。今回、全員が改選されます。理事はメンバー団体と関係はありませんが、NPJ の共同代表君島東彦はアジア選出の理事ですが、今回は理事を辞退しました。そこで、NPJ から理事の阿木幸男が立候補しております。

② 5 ヵ年戦略計画の承認（2008-2012 年）：

NP としての初めての中･長期計画です。NP の今後についてのコンセンサス作りに極めて重要な議題です。現状では、とても実現性のないと思われるような内容もありますが、議論を通じて NP の幹部とメンバー団体の意思疎通が計られると期待しております。詳細は別記をお読みいただくとして、本計画は、2005 年 8 月に戦略計画チームが発足されて以来、2 度の理事会で審議され、今年に入り草案がメンバー団体にも配布され、それらの意見を勘案して今回が第 4 次の草案です。

③ メンバー団体の改革（支援団体のカテゴリーの新設）：

現在、NP は世界中の 100 近いメンバー団体で構成されています。全てのメンバー団体は同じ権利･義務を有しています。これは組織運営の効率性、迅速性を妨げるものであり、新たに支援団体のカテゴリーを設けて、メンバー団体との権利･義務を分けようとするものです。メンバー団体の主要な運営参画権限は・国際理事会メンバーの選出・規約の改定・長期計画の承認・国際総会への参加・情報の共有と NP 活動評価への参画等を含みますが、支援団体はこれらの権限を有しません。しかし、活動の情報共有、要員の募集・訓練の支援,NP の P.R.への貢献、資金集めのための協力などを含みます。

☆NPJ は、今後もメンバー団体として NP 活動に積極的に参画していく予定です。

3. ナイロビ総会への参加：

NPJ からは共同代表の大畑　豊と理事の阿木幸男が参加します。また、NPJ 理事の岡本三夫は NP 東アジア地域コーディネーターとして参加します。当初、参加に消極的であった韓国 NPC も、日韓会議に参加して NP の活動を理解でき、総会に代表を送ることになりました。日本のメンバー団体であるピース・ボートも参加を前向きに検討中とのことです。

4. ナイロビ総会で参加者がさまざまな意見を出し合って共通の理解を深め、参画意識を強め成果を挙げることを大いに期待しております。

戦略 5 カ年計画の概要（2008－2012 年）

♦ 2012 年 12 月を目標とした NP の進む

べき方向性、幾つかの広義の行動ステップ、それらの期待される成果を 4 つ（Ⅰ～Ⅳ項）の戦略的行動分野として示したものである。（具体的計画は、毎年実行計画として策定される。）

はじめに　　NP の目的と NP を取り巻く最近の国際社会の動向

- NP の目的は、真に恒久的なインパクト

を持つことのできる非武装の市民平和維持軍を、国際的なスケールで訓練し、派遣し、唱導することである。

- 安全保障理事会は 2006 年 4 月、国家が

自国の市民平和活動家を保護する基本的責任を満足させる意思がなく或いはそうする実力がない場合は、国際社会が行動することを約束するという“保護責任”の国連決議を再確認した。また、国家の安全保障の必要性よりも人類の安全保障の必要性を重視しようとしている国が増えている。最近の、このような責任への非武装的アプローチの議論は、多国籍組織（国連、EU 他）、政府組織さらには大規模開発や人道支援団体の幾つかで出始めた。これは NP の活動（非政府組織の市民非武装平和維持活動）への政治的、財政的支援の新たな可能性への道を開くものである。

4 つの戦略的行動分野

Ⅰ．国際的派遣と派遣準備

① フィールド実績を積み重ね、プロジェクトの外部評価を行い、失敗や経験から学び取る組織文化を確立し,NP の派遣を著しいインパクトを持つものとして確立する。

② 100 人規模の派遣プロジェクトを少なくとも一つと緊急対応を含む超短期の幾つかのプロジェクトを実施。そのために；
- 派遣国、他の NGO、多国籍機関、資金提供者等への実績と評価の確立
- メンバー団体（MO）との緊密な連携
- 派遣計画のための調査能力とネットワークの拡充
- 規模、期間、タイプの異なるプロジェクトの遂行
- 必要資金の確保
- あらゆるレベルでのマネッジメント力を含む要員の募集、評価、訓練体制確立
- 各プロジェクトを支援するに十分な様々なインフラの整備
- 他の NGO、INGO との協働、補完
- MO を中心とした緊急対応ネットワークと国際的支援インフラの世界的メカニズム構築

③ 常時、200 名以上の FTM を派遣する体制の構築。そのために；
- 400 名の NP“コア･トレーニング”済みの平和維持活動家のプールを持ち
- NP の FTM に必要とされる訓練の認定プロセスを定め
- FTM の可能性ある人材を評価する専門家を増強し

- ♦ 更に、FTM として参加する意思を持ち、基本的な NP の資格を満たした 500 名の登録者リストを準備する。
- ♦ 750 名がコア･トレーニングの要件を完了
- ♦ 35 名のコア･トレーナー資格者の登録
- ♦ 即時、FTM として派遣できるよう待機中の予備役の処遇制度を導入
- ♦ 地域レベルの経験ある FTM の国際的派遣へのキャリア･パス制度の開発

④ 少なくとも 5 つの短期間のミッションの完遂。そのために；

- ♦ 多国籍機関の要請に応じた選挙関連の派遣の試み
- ♦ 小規模―中規模の派遣要請にタイムリーに応じられるよう初動的対応能力の確立
- ♦ 上記のためのひも付きでない資金提供者の開拓
- ♦ 柔軟な対応を可能にするための社内組織運営上の改善

⑤ 責任ある派遣を完了するための撤退戦略の開発。

- ♦ NP は地域の活動家或いは他のメカニズムに引き継ぐための撤退戦略を確立
- ♦ 撤退の時期、撤退戦略の有効性確認のための外部評価の実施

<u>Ⅱ．地域レベルの強化</u>（注記：この場合の地域は,NP の地域、例えば北米、ヨーロッパ、アジア等の地域を指す）

① NP は,NP の趣旨に賛同する各地域のメンバー団体（MO）から構成されているので、NP は、MO の力量に応じた支援、協力を行う。そのためには；

- ♦ NP は MO と共同で派遣する場合もある
- ♦ 訓練能力を持つ地域では,NP は高度の訓練の準備を支援
- ♦ そうでない場合は,NP は MO の訓練能力の開発を支援する
- ♦ NP と MO 間の情報の記録、共有のためのシステムを導入
- ♦ NP と MO は共同して、任期終了して帰国した FTM を派遣能力増強に活用する

② 50 カ国に強固な MO を確立させる；そのために；

（注記:この場合の MO は現在の MO の定義と異なる―>今回のナイロビ総会で決議予定）

- ♦ 地域コーディネーターは新たな MO を勧誘する
- ♦ 国際理事会の重要問題に関し、インターラクティブな内部コミュニケーションが図られるような MO ネットワークを構築
- ♦ MO と NP 間、MO 相互間のコミュニケーションのメンテと促進を図る
- ♦ MO の地域戦略参画を通じて,NP の全体的グローバル戦略に貢献する
- ♦ NP,MO 共同でスタッフを含む地域内、地域間のインフラを整備

- ♦ 人材開発のために必要ならばNP、MO共同して資金を調達する

Ⅲ．付加すべき組織的能力構築

① 国際理事会：☆NP に必要とされる能力、支持基盤を持った代表の人選☆（管理機能ではなく、）統治機能の役割明確化☆効率的、効果的な意思決定

② 管理/マネッジメント：☆グローバルサウスに国際事務所移転☆組織的能力開発、支援に経験を有した国際的、地域的組織からのアドバイス☆緊急派遣のマネッジメント能力のある人材の採用☆大規模派遣の実施、管理に必要な内部管理体制と派遣先をも含む広範囲な支援体制の確立☆組織上層部での多言語組織として機能できる体制☆グローバル体制を支えるにふさわしい必要とされる IT 構築☆人的資源のスキル向上のための投資☆国際基準を満たす経理、財務管理制度の確立

③ 資金調達（募金）
- ♦ プロジェクト決定後の資金確保、調査、緊急対応、新規プロジェクトの初期段階等に必要な十分な戦略的予備資金の確保
- ♦ 大規模派遣のための資金提供者の確保をはじめ,NP のフィールドの実績の有効的な活用による資金調達のインフラの整備

④ 戦略的関係（注記：これは、Ⅳ項と関係あり）
- ♦ NPのプロファイリングの必要性と、そのための戦略関係スタッフのスキル向上
- ♦ 地域レベル強化のための戦略関係能力の強化

Ⅳ．一般への知名度と支持層の構築

① NP は、多くの国々で多国籍機関、政府、政治家、戦略的市民社会組織と有効な関係を確立する。
- ♦ 戦略的関係構築アプローチは、プロジェクトごとのニーズに応じて行う
- ♦ それぞれの機関、組織内の理解者と協働して NP のプロファイル並びに非武装の市民平和維持活動の包括的なプロファイルを高める方策を追及する
- ♦ 上記はまた、MO や他の NGO との密接な連携をとりながら進める

② NPは、50カ国におけるNPの理解者である一般支援団体（支持者）にNPの活動のプロファイルを高める。
- ♦ NPは、まだNPがまだ着手していない地域で、目標を絞ったメデア戦略を実行する
- ♦ 世界の様々な地域でマスコミ報道、公共イベント、著名人の奉仕などによりNPをPRする
- ♦ これらの活動は、それらの地域のMO と共同で行う。ただし、政治的立場をとらないことを留意する。

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

2007年９月理事会議事録

日時: 9月1日（日）15時～17時05分
場所:　東京　白山事務所

・出　席（9人）（以下敬称略）
青木護、青山正、阿木幸男、安藤博、
大島みどり、大橋祐治、大畑豊、
小林善樹、吉岡達也（代理)野平晋作
・委任状出席（6人）
浅見靖仁、小笠原正仁、岡本三夫、
奥本京子、君島東彦、清末愛砂、
・欠　席（1人）（委任状なし）　城間悠子
・オブザーバー　田中泉
議長：安藤博、書記：小林善樹 /
議題右の( ) 内は提案者/報告者・担当
（議題　続）
5.会員拡大策(プロモーション映像作成について、会費納入方法)
6. その他

****

1.「NP日韓/東アジア交流会議」の総括(順不同)

1)「交流会議」を、NP内輪だけに止めず、広く外に向けてNP活動を伝え、会員拡大につなげるという点で、至らない面があった。(シンポジウム参加者名簿の一時「行方不明」など)
2) NPCからの報告により、韓国における民主化運動の歴史や現状を知ることができた。
3)スリランカでの4年間の活動を直接に聞くことができ、スリランカの状況がよくわかった。
4)リタからは、移動時間が長過ぎた、との感想があった。
5)ディヴィッド、リタ、パークさん、いずれも内容がよかった。
6)10日のシンポでのパークさんのプレゼンテーションはよく準備された内容だった。
7)後日談になるが、NPCがナイロビ総会参加することに決めたのは大変歓迎すべきことであり、岡本東アジア地域コーディネーターのご尽力に感謝するが、NPCがこの交流会に参加し、論議を交わす中で、国際的にNPに関わって行こう、と決断したものであり、交流会の大きな成果と言えよう。
8)小笠原理事のご尽力により、高野山という思索の場が得られたことは意義深かった。
9) 今後、非暴力トレーニングをNPCと合同で開く計画を立てよう。

●理事会成立条件: 9名出席、委任状提出6名、計15名で、定足数(理事17名の過半数)を満たしており、成立。

議題
1. 「NP日韓/東アジア交流会議」の総括
2. ニューズレター
3. 「NP出版」計画
4. 第2回国際総会に向けて

****

2. ニューズレター(大橋)

印刷、郵送の日程は9月13日、原稿締切りは9月8日。
編集方針について
1). 巻頭言：安藤博（日韓東アジアに関して）
2). 日韓東アジア会議関係：
① 会議スケジュールと出席者：（大橋）
② 会議の概要と特記事項:(小林)
③ リタの発言要旨(フィールドの第一線から）：（大橋）
④ 48人のタミールの母の詩：（大島）
⑤ 会議に出席して：（前田恵子）
3). ナイロビ総会関係：
① 会議日程、日本からの参加者：(既に翻訳したものを活用)
② 戦略計画(今回の最終版の要約、NP意思決定メカニズム）：（小林、大橋）
③ その他の主要議題の概要など

4)．その他

① 9月1日理事会報告

② 庭野平和財団からの助成金(庭野平和財団助成金の概要と今回NPJが受けた助成金についての報告）：（大橋）

③ NP8月資金ショートに対するNPJの緊急援助(NPの資金計画の基本方針、規模などの説明を加える）：（大橋）

④ 帰国報告：（徳留由美）

3. 「NP出版」計画

・リタのテキストの中にあった「拉致された子どもの母親たちの詩」は、評判がいいのだが、著作権の問題が不明確なので、掲載はしない方向で進める。(会報に載せるのはいいだろう)

・ パークソンギョン氏のテキスト日本文は、日本人には理解しにくい単語が使われているので、見直すこととした(小林)。ピースボートに日韓両国語に堪能な人がおられるとのことで、その方にも見直ししていただくことにした(1週間を目処に)。

4. 第2回国際総会に向けて

1)一連の行事は、24日の地域会議、25・26日の国際会議、27・28・29日の国際総会、30日のトレーニングとあるが、大畑、阿木両氏は9月22日に離日、大畑は27日まで、阿木は30日まで滞在の予定。

2)ピースボートから1名参加する由。参加予定者は現在乗船中で、登録はこれから、ということだが、たぶん受け付けられるだろう。

3)阿木がIGCに立候補を決断したのは、情報入手のためにもNPJからIGCに誰かが出ていることが必要であろう、と考えて立候補した、との意志表明がなされた。情報の和訳のため、翻訳チームの増強を考えたい。現在は大橋(友人の杉山氏にも頼んでいる)、小林でやっているが、徳留氏、田中氏の参加を要請する。和訳の要否を判断して取り組むこととする。

3)出席者帰国後に、ピースボートと共催で、国際総会の報告会を開くこととする。11月7日(水)18時～、会場はピースボート(詳細後報)。NPJとしては会員全員に呼び掛ける

4)総会議題について

・メンバー団体、支援団体

今回メンバー団体(MO)の資格要件を明確に規定し、新たに支援団体というカテゴリーを設けるなどの提案と関連規約改訂案が出されている(その内容はMLで配布済み)。総会では、関連規約の改訂審議、承認の後で、資格要件などの審議がなされるまでで、参加申請の手続に入るのは総会後ということになるだろう。新たな規約に基づく資格要件に則して、NPJがどのような資格で参加することを申請するかは、本来NPJ総会に掛けるべきかと考えられるが、NP総会に臨む姿勢としては、これまで同様MOとして参加する、という方向をこの理事会で確認した。

今回このような提案に至った背景としては、NPの活動に対して活発と不活発なMOを仕分けしようという意図があるであろうし、MO組織をスリムにして機動性を高めよう、あるいはECOSOCの資格の問題に絡んで、Nonpartisanship をより明確にしようという意向もあったであろう。

・戦略計画の第4草案

前の草案と大きく変わっているのは、この計画の数値目標はそのままにして、期間だけを2007年～2010年(実質2年数カ月)から、2007年～2012年まで(実質4年数カ月)に2年間延長し、ペースをほぼ半分に落としたことであろう。

また、目標として、大規模化とともに、PBI程度の小規模プロジェクトも併記している。

・情報システムの確立を強く要請したい。7月1日からコミュニケーション・ディレクターを採用したはずなので、今後は改善することが期待される。最近ウェブがすっかり変わっている。これまで、ハードコピィで来ていた「ルーマーズ・オブ・ピース」がウェブに掲載されるだけになっているが、ハードコピィでもらうように請求しよう。リーフレットも同様。

5. 会員拡大策（プロモーション映像作成について、会費納入方法）

・プロモーション映像作成について（田中）
この提案は鞍田監査役の提案に端を発し、田中泉氏、中原隆伸氏が模索されている会員拡充策の一環なのだが、
(1)NP がウェブで流している動画と、NPJ が所有しているディスクの内容が同じものなのかどうかを調べる。
(2)NP が流している動画を利用するものと仮定して、その英文を日本語の字幕化する素材を徳留氏に委託するものとして（徳留氏はこの字幕文作成の仕事を、アルバイトでやっておられる）、字幕を入れるためにはどの程度の費用がかかるものなのか、を田中氏から中原氏を経由して中原氏の知人に問い合わせる（田中）
(3) NPJ とピースボートで、スリランカとミンダナオに派遣して日本語の映像を作成してはどうか、との意見も出された。
・会費の自動振込方式提案（小林）
JVC では会費を一口毎月 500 円自動振込方式としている（「国境なき医師団」は一口毎月 1,000 円）。 会員勧誘の際に、年額 5 千円とか 1 万円というよりも、月額 500 円とか千円という方が抵抗感が少ないのではないか? 取り扱い手数料を払っても、会員拡大ばかりでなく、確実性、継続性の面から見て有効ではないだろうか? 200 人程度の規模で扱ってくれるのかどうか、条件を問い合わせることとする（大畑）
大橋より、8 月は会費納入が少なかった、との発言あり、会員数維持の点でも懸念がある。

6. その他

1) クリック募金
条件などを調査すること（田中）
2) 次回理事会日程と場所
次回は、12 月 9 日（日曜日）16 時～、東京の白山事務所

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

ミンダナオより
帰任の報告

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

徳留　由美

ＮＰＪの会員の皆様へ、ミンダナオからの帰任の報告をいたします。

私、徳留由美は、２００７年5月１日付けで、フィリピン、ミンダナオ･プロジェクトに赴任いたしましたが、一身上の都合により、６月末に帰国・帰任いたしました。

プロジェクトへの赴任前は、昨年度参加いたしました、ナイロビにおいてのコア･トレーニング等、ＮＰＪの皆様には大変お世話になりました。あまりにも短い期間で帰任という形になり、大変申し訳ありません。

約2ヶ月間という短い間でしたが、ミンダナオ活動の現状を皆さんに伝えたい思いがあります。＜日韓/東アジア交流会議＞を機とするＮＰＪ編集の出版本に、原稿を寄せました。詳しい内容につきましては、出版される本を読んでいただけたらと思います。

この「交流会議」にも参加させていただきました。現在は、鹿児島の実家におり、微力ながらＮＰＪ活動のお手伝いさせていただいています。

これからもよろしくお願いいたします。

会員募集

■非暴力平和隊の理念と活動に賛同・支援してくださる個人および団体を会員として募集しています。入会のお申し込みは、**郵便振替、銀行振込、非暴力平和隊･日本ウェブサイトの「入会申し込みフォーム」**をご利用下さいますようお願いいたします。

❂正会員（議決権あり）
- 一般個人：１万円
- 学生個人：３千円

＊ 団体は正会員にはなれません。

❂賛助会員（議決権なし）
- 一般個人：５千円（１口）
- 学生個人：２千円（１口）
- 団体　：１万円（１口）

■ **郵便振替：00110 - 0 - 462182　加入者名：NPJ**
＊通信欄に会員の種類を(賛助会員の場合は口数も)ご明記ください。 例：賛助個人１口

■ **銀行振込：三井住友銀行 白山支店　普通 6622651　口座名義：NPJ 代表 大畑豊**
＊銀行振込をご利用の場合は、お手数ですが電話･ファックス･メールのいずれかを通じて入会希望の旨、NPJ 事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

■ **ウェブサイトからのお申し込み：http://www5f.biglobe.ne.jp/~npj/nyukai.html**

ご案内:

『平和･人権･ＮＧＯ すべての人が安心して生きるために』（新評論、2004 年）

君島共同代表が「平和をつくる主体としてのＮＧＯ」という章で、ＮＰのことを詳しく紹介しています。この章の抜き刷りを販売しております。ぜひＮＰの紹介にご活用ください。Ａ５版・表紙カラー・一部３００円（送料別）、ご注文は事務局まで。

「ふくしま非暴力平和隊ネット」で試作した缶バッジ

非暴力平和隊を宣伝し、資金を集めるために、ＮＰＪ福島在住メンバーで作った缶バッジの普及にご協力ください。ＮＰの鳩のデザインをあしらった、かわいく、洒落たバッジです。価格は１個２００円で、１０個以上のご購入の場合は１個１００円です。
【９０円切手を貼った返信用封筒】と【代金の小為替】を同封して次までお送りください。〒９７１－８１７１　いわき市泉が丘２－３－４　鞍田　東

▲◈◉◍◙▣▤　事務局便り　▤▣◙◍◉◈▲

今回初めてニューズレターの編集を担当しました。9 月理事会議事録がうまく納まりませんでした。今後も皆様のご助言をよろしくお願いいたします。（大橋　祐治）

非暴力平和隊(NP,Nonviolent Peaceforce)とは……

地域紛争の非暴力的解決を実践するために活動している国際 NGO で、非暴力平和隊･日本(NPJ)はその日本グループです。

これまで世界中の平和活動家たちが小規模な非暴力的介入について経験を積み、功を収めて来ました。NPはこれを大規模に発展させるために 2002 年に創設されました。非暴力･非武装による紛争解決が「夢想主義」でも「理想主義」でもなく、いちばん「現実的」であることを実践で示していきます。

NPは、地元の非暴力運動体･平和組織と協力し、紛争地に国際的なチームを派遣、護衛的同行や国際的プレゼンス等によって、地元活動家等に対する脅迫、妨害等を軽減させ、地域紛争が非暴力的に地元の人によって解決できるよう、環境づくりをすることを目的としています。

NPは 2003 年9月からスリランカでの活動を開始し、現在20カ国から25人のメンバーを派遣しています。